「そしある」さん　第　3号

2026年　1月発行　編集担当：樋口

●自己研鑽を絶やさない～研修及び調査、研究（その2）～

「医療ソーシャルワーカーの業務指針」の改定作業が行われている。２０２５（令和7）年１２月１７日に第４回在宅医療及び医療・介護連携に関するワーキンググループで示された改定案では、「四　医療ソーシャルワーク部門の体制整備」の中で、「（4）研鑽及び調査、研究の促進」と、「研修」が「研鑽」に置き換わっている。「研修」は教わるという受け身的側面が強いが、「研鑽」は自ら努力し知識・技術を磨き続けるという主体的側面がある。

本文では、「社会福祉等に関する専門的知識、技術の向上を図ることができるよう体制を整備すること。」とあるので、初任者から管理者まで、その経験年数等に応じてラダー等を整備する必要がある。そのため体制が整っている病院では、事例や業務報告等を、部署内・院内・県内・九州・全国学会とステップを踏んで発表する機会を設けている。スーパービジョン（SV）が、日常的に行われている証でもある。しかし、九州や全国学会で発表する病院が、だいたい同じ顔触れなのは少し残念だ。

研鑽ということでは、やはり自らの実践事例をまとめて発表することが、最も学びが多く・広く・深くなると思う。事例検討と事例研究の違いもあるが、様々な視座や視点から意見をもらうことができる。当協会でスーパービジョンについて最初に学んだのは、奥川幸子先生の「奥川グループスーパービジョン（OGSV）」だった。OGSV は、仲間同士が互いに支えあい高めあうグループ活動として発展し、先生は対人援助職トレーナーとして、全国で SV を引き受けておられた。その奥川先生が、沖縄の MSW のために、何度も沖縄に足を運んでくださったのは本当に有難いことだった。

先生が OGSV の中で常におっしゃっていたのは、ソーシャルワーカーとして、「当事者への畏敬の念と謙虚な気持ちを忘れないこと」「気づき、振り返り続けること」「利用者の“福利”をいつも考えること」だった。SV では、「問題の“中核”は何か？」「“俯瞰”してみる（ポジショニング）」「地域特性、文化的背景を読み取る」ことが求められた。

そしてグループとしては、「バイジー中心、バイジーをサポートすること」「私的な私、職業的な私を認めること」「愛情のあるまなざしで育てること」を学んだ。

初任者には、「とにかくクライエントのために一生懸命がんばること」「クライエントの役に立たなくても不利益を与えないこと」「自分の感性は疑わないこと」と励ましてくださった。また中堅者には、「何のための問いなのか、聴くからには手当てができなければならない」「臨床の４つの目玉：透視・観察・驚き・分析を持つこと」「本人の生きざま、強さ、覚悟を見積もること」が重要と話された。

OGSV はメンバーが入れ替わりながら続けられ、研修として行われる事例検討会前のプレ検討や学会発表前の予演、研修会のシラバス検討などをとおし、スーパーバイザーが育った。２０２２年6月からは、事例研究会として事例研究の基礎を理解し、起こった現象や支援活動を客観的な視点から分析することを目標とし、問題の所在と社会的意義をミクロ・メゾ・マクロレベルの視点で考察し、実践の理論化を目的として活動している。

MSW の仕事は、業務指針の文章だけでは分かり難く、可視化し難い。つまり、このような事例では、、、と、初任者から管理者まで皆で手分けして、実践事例集を協会から出版するのが私の夢だ。

●MSWのつぶやき（編集後記）：

３号では、事例検討・事例研究やスーパービジョンについて振り返りました。“事例を書いて”と依頼すると、決まって断られることが多いのは、批判される・攻撃されるのではないかと不安になるからです。県協会には、めだかの学校やホームルーム・放課後と、ソーシャルワーカーらしい率直で、また暖かいコミュニケーションが交わされる、事例を持ち寄った勉強会・研究会があります。事例をまとめるのは大変だけど、皆に聴いてもらえてよかったと思える集まりですので、ぜひ参加して下さい。表現や認識に間違いや、お気づきの点がありましたら、ご指摘ください。内容へのご意見・ご感想もお寄せ下さい。**●連絡先：m.higuchi@okiu.ac.jp**